


稲むらの火 継承宣言（日本語訳）



2015年12月の国連総会で11月5日が「世界津波の日」と制定されたのは、安政元年（1854年）11月5日、安政南海地震による津波が現在の和歌山県広川町を襲った際、濱口梧陵が稲むらに火をつけ、村人を高台へ導いて、多くの命を救った「稲むらの火」の故事にちなんだものです。

その後、濱口梧陵は自らの財産を使って村の再生を支援し、将来の津波に備えて堤防を築き、この堤防は昭和21年（1946年）12月の昭和南海地震による津波の被害を最小限に抑えました。

これから私たちが、それぞれの国で防災活動に取り組むうえで、「稲むらの火」の故事に含まれる①人命救助、②地域の復旧・復興、③将来の災害への備え、の3つの要素を考えることは、非常に大切なことです。

本年、私たち世界48カ国の高校生は「稲むらの火」発祥の地である和歌山県に集まり、地震津波などの自然災害から命を守るため、私たちが何をすべきか、私たちに何が出来るかを話し合い、共有しました。

1 災害について知識を得る

- 自然災害に対する備えができていないことが最も憂慮すべき問題であると考えました。
- 生徒全員が学べるよう、自然災害に関する学習を学校のカリキュラムに取り入れ、実践するというアイデアを共有しました。
- 地域住民全員と防災活動（避難訓練など）に取り組んでいきたいと思えます。

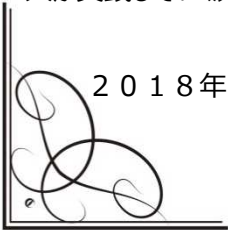
2 災害に備え意識を高める

- 災害は、地域ごとに異なる地理的特徴と関係があると考えました。
- 被災者の話を聞くことにより、災害に対する備えの重要性について人々の意識を高めるためのアイデアを共有しました。
- 防災情報の各種ツールについて学んだ上で、実際の避難時に人々の助けになるようなユニバーサルデザインの標識を設置する努力をしようと思えます。

3 災害から生き抜く

- 災害後の復旧・復興について、事前に計画を立てることが重要だと考えました。
- 災害発生前・災害発生時・災害発生後の助け合いの重要性について、認識を共有しました。
- 地域の年配者や専門家による講話またはハザードマップにより、自然災害のリスクを人々に伝え、災害時にパニックに陥らないよう明確なルールと計画を作成しようと思えます。

世界中の防災意識をさらに向上させていくため、私たち若い世代が濱口梧陵をはじめとする偉大な先人の志を継承し、このサミットにおいて学んだ「災害から命を守る」ためになすべきことを、それぞれの国において、私たち一人一人が実践していく決意をここに宣言します。



2018年11月1日

「世界津波の日」2018高校生サミット in 和歌山

